

主」となり得ている母の姿に対して手を合わせているからである。長い人生には逃げようとしても、どうしても逃げられない、耐え切れそうにない場もある。生涯に一度ならず絶体絶命の場がある。その時に愚痴や不満をぶちまけても何の役にも立たないものだ。そうではなく、置かれた場に生き切ること、そしてどんな場であってもその場の主人公になる。「随処に主と作れば、立処皆真なり」。その心が出来た時、初めてその人の本当に生きている姿が出てくる。

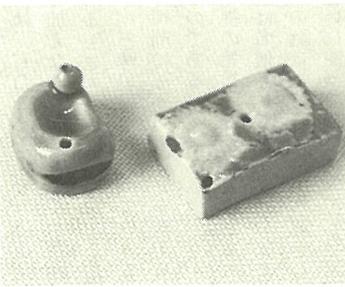
もし、スポーツがこういう人間をつくる場であれば、どんなにか人間的なものになれることだろう。「たかがスポーツ」というけれど、八重樫選手は自分が置かれている場に生ききった人である。すなわち、スポーツによって自己を発見し、そこを自己完成の場としたのである。
(大学経済学部教授)

同志社校地出土の埋蔵文化財(17)

鈴木 重治

そのつけま、かもんずいてき
染付菊花文水滴

せいじとびてつしやそまめがたすいてき
青磁飛鉄砂空豆形水滴



筆をとる前に硯に向う。墨を擦るためである。水滴から硯の海の部分へ、程よくしずくを落す。練墨を軽く持って、心を鎮めて無心に擦る。光沢をもった黒々とした墨が擦り上る。このような光景を見なくなると、あまりしなくもなつた。

日常生活の中から姿を消していった文具類の中で、もつとも愛らしいものの一つが水滴である。硯が使われるようになってす

で古い、古墳時代以降の出土品についてみると、奈良県斑鳩町の御坊山三号墳で検出された中国からの輸入品である三彩の陶硯が知られている。しかし、それに伴う水滴はない。

出土品でみるかぎり、水滴の普及は江戸時代に入ってからであり、とりわけ伊万里焼の磁器が、全国的に流通する頃からである。もとより水滴の材質には金属や漆器などもあるが、これらは地中での保存が悪く、資料としては残り易い陶磁器の中に貴重なものが含まれている。

写真に示した資料は、公家屋敷の旧二条家地点からの出土資料で、ともに伊万里焼の製品であるが、片方が染付で他の一方が青磁である。型造りの菊花文を影青で、葉を呉須で飾った長方形の水滴は、上面の中央と一カ所の隅に小孔をもっていて、使い易さと簡潔な美が追求された造形を示す。

一方、空豆形の水滴は、青磁の青緑色と飛鉄砂風の黒色を含めて、写実的な造形が特徴的であり、使用者の心情に答えた作品といえよう。季節感のあふれた水滴の優品である。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)